

石川県 小松市の石仏

資料作成：滝本やすし(石川県金沢市)



串茶屋町共同墓地の観音下石製六地藏

- 01 那谷町 共同墓地／光導名号塔
- 02 那谷町 高野山真言宗那谷寺／
西国三十三ヶ所観音、弁財天、毘沙門天、青面金剛(庚申)
- 03 滝ヶ原町 滝ヶ原石採石場／坑道掘りの採石場(荒谷石材)
- 04 滝ヶ原町 八幡神社／五輪塔群、五重塔
- 05 粟津町 高野山真言宗大王寺／
西国三十三ヶ所観音、泰澄大師、花山法皇、不空羂索漢音、愛染明王
- 06 牧口町 牧姫塚(蟬丸塚)／五輪塔、光導名号塔
- 07 観音下町 観音下石(日華石)採石場／露天掘りの採石場(観音下石材)
- 08 観音下町 白山神社／灯籠、層塔、五輪塔群
- 09 向本折町 市営共同墓地／千体仏供養塔2基
- 10 天神町 小松天満宮／十五重石塔
- 11 寺町 曹洞宗建聖寺／地藏
- 12 向本折町 多太神社／斉藤実盛石像、松尾芭蕉石像
- 13 串茶屋町 共同墓地／遊女の墓
- 14 河田町 路傍／地持地藏、「下品中生」
- 15 能美町 共同墓地／陀羅尼地藏、「下品下生」
- 16 千代町 共同墓地／鶏龜地藏、「鶏龜地藏」
- 17 埴田町 路傍／虫塚
- 18 岩淵町 路傍／虫塚
- 19 中海町 赤穂谷温泉／薬師如来、金精道祖神
- 20 中海町 高野山真言宗寶生寺／車地藏
- 21 原町 集落はずれ／仏御前墓標
- 22 原町 仏御前屋敷跡／仏御前供養塔
- 23 原町 林家／金剛界大日種子・阿弥陀坐像板碑
- 24 尾小屋町 路傍／仏御前の地藏
- 25 北浅井町 路傍／光導名号塔
- 26 赤瀬町 那殿観音(那谷寺奥の院)／西国三十三ヶ所観音

01 那谷町 共同墓地／光導名号塔

浄土宗三光院は荒廃し無住となっていたが、一昨年10月に大本山鎌倉光明寺の布教師である中塚時眞氏により約70年ぶりに再興された。那谷町福祉会館に納められていた仏像等が、新しい三光院に安置された。

那谷町共同墓地内に光導と弟子の名号塔が並んで建てられている。これらは三光院境内に建てられていたもので、三光院が取り壊された時に共同墓地に移されたものである。3基の名号塔は三光院の方を向いて建てられており、右から順に、光導、光念、光巖の書である。

光導名号塔は「南無阿弥陀佛」の書体が他の光導の名号書と異なっている。右に「善導大師傳書」とあり、光導が手本とした善導大師書の写しではないかと考えられる。右側面に「明治十年九月建立之」とあり、光導76歳頃の造立である。

光念名号塔は左側面に「為三界萬靈佛泉」右側面には「明治十年九月建立之」と記されている。光導名号塔と同時に造立されていることから、この時に光導が光念に三光院の住職を譲ったものと考えられる。

光巖名号塔は右側面に「明治二■九年七月三十日」と記されており、三光院に残されている光巖の位牌の日付と一致している。したがってこの名号塔は光巖の墓標と思われる。「南無阿弥陀佛」の下に「辻光巖」と刻まれている。光巖の姓は辻野であり、野を略したものとみられる。



那谷町共同墓地に並ぶ光導と弟子の名号塔

02 那谷町 高野山真言宗那谷寺／

西国三十三ヶ所観音、弁財天、毘沙門天、青面金剛(庚申)

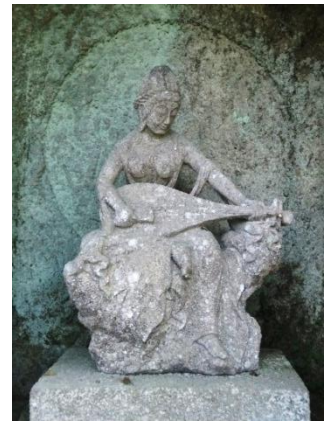
那谷寺は高野山真言宗別格本山で、養老元年(717)泰澄大師が千手観音像を安置して自生山岩屋寺を開山したのが始まりと伝えられる。寛和年間に花山法皇がこの岩屋寺を訪れ、西国三十三ヶ所の第1番那智山の「那」と第33番谷汲山の「谷」とを合わせて那谷寺と改名した。その後には塔頭寺院250を数え栄えたのだが、文明年間の一尙一揆により多



那谷寺山門

くの堂塔が焼かれ荒廃した。しかし前田家三代藩主・利常により、五年間の工期を費やし復興した。岩屋本殿、書院、三重塔、護摩堂、鐘楼が国の重要文化財に指定されている。秋の紅葉の時期には多くの人で賑わう。

山門をくぐり抜け左手の華王殿の裏へ進むと、岩盤をくり抜いた中に弁財天像が納められている。高さ約80cmの丸彫り坐像で、赤戸室石(安山岩)製である。琵琶を持った美しい女性の姿に彫られている。



弁財天



毘沙門天

戻って岩屋本殿の方へと進んでゆくと、左手の池の向こうに奇岩遊仙境と称される岩山が見えてくる。地蔵や観音が並ぶこの岩山を登ると、最上部に賽の河原と呼ばれる石窟がある。ここには地蔵が立ち並び、多くの小石が積み上げられている。

岩山を降りてさらに本殿の方へと進むと、石段の登り口の左に不動明王が、右には毘沙門天像が見えてくる。不動明王は半肉彫り立像で、参拝者により手洗水がかけられて苔むしている。毘沙門天は邪鬼を踏みつけた丸彫り立像で、岩屋本殿を守るために本殿を背にして立っている。

岩屋本殿を抜けて三重塔の方へゆくと、この三重塔の左手から西国三十三ヶ所観音巡拝道が始まる。三十三ヶ所観音巡拝道は三重塔の裏山を通り、第14番で芭蕉句碑の横に降りてくる。護摩堂の左手から第15番以降が始まり、再び山中を通り鐘楼の右手の第33番へたどり着く。33体の観音はすべて光背型の浮彫りで、台石に御詠歌が刻まれている。

芭蕉句碑の右手に青面金剛が立っている。「縁結びの神 庚申様」の札が建てられている。四臂の丸彫り立像で、邪鬼を踏みつけている。邪鬼の顔の下には2羽の鶏が、邪鬼の足元には3匹の猿が彫られている。青面金剛の前に建てられている石柱には「奉燈萬延元庚申九月」と記されている。青面金剛の後の岩盤上に七重石塔が建てられている。寛永年間に前田利常が寄進したもので、那谷寺の石造物の中ではもっとも古いものと思われる。



青面金剛(庚申)

03 滝ヶ原町 滝ヶ原石採石場／坑道掘りの採石場(荒谷石材)

滝ヶ原の石は文政年間に、大滝と上山との2ヶ所の石切丁場で本格的な採掘が始まった。この2ヶ所の石切丁場で採掘される石は、硬い淡紅青色の凝灰岩であった。大滝丁場は明治初期に、上山丁場は近年廃絶した。天保年間に西山丁場で中硬質の淡緑青色の凝灰岩が採掘されたが、こちらも落盤等で近年廃絶している。その後多くの石切丁場で中硬質の淡緑青色の凝灰岩が採掘



滝ヶ原石坑道掘りの採石場

された。滝谷西丁場では軟質の淡褐色の凝灰岩、山崎丁場では軟質の淡灰色の凝灰岩、差谷丁場では軟質の褐灰色の凝灰岩が採掘された。最盛期の昭和二十年代～三十年代初頭には10ヶ所の石切丁場で採石が行われていた。

滝ヶ原で現在でも採石を行っているのは、荒谷石材のみであり、ここでは中硬質の淡緑青色の凝灰岩が採掘されている。3台のチェーンソーによって石が切り出され、奥行250メートルほどの坑道が掘られている。滝ヶ原に現在数社ほどある石材業者のうちの2社ほどが以前に採掘した在庫を販売している。

滝ヶ原では川に架かる石橋が多く作られ、現在5つの石橋が残されている。

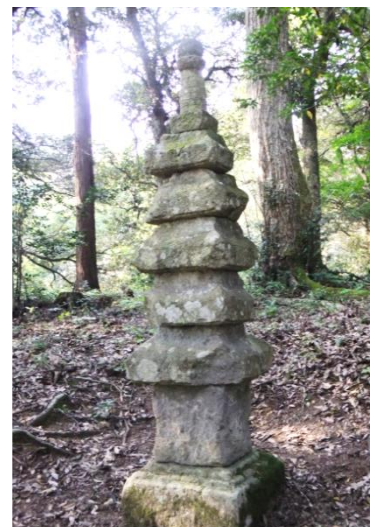
04 滝ヶ原町 八幡神社／五輪塔群、五重塔

滝ヶ原町には石材採掘の最盛期、4ヶ所に神社があったのだが、石材業の衰退とともに数が減り、3年ほど前に1社に統合された。境内には多くの石造物が立ち並び、そのほとんどは滝ヶ原石製である。

境内登り口左手の2つの巖窟内に、平安時代末期～鎌倉時代前期の作とみられる小型の五輪塔10基ほどが納められている。左側の巖窟の奥壁には、阿弥陀の種子「キリク」が陰刻されている。境内のやや下がった場所には、滝ヶ原石製の五重塔が建てられており、その様式から鎌倉時代の造立と思われる。



五輪塔が納められた巖窟



八幡神社の五重塔

05 粟津町 高野山真言宗大王寺／

西国三十三ヶ所観音泰澄大師、花山法皇、不空羅索観音、愛染明王

養老2年(718)泰澄大師によって泰應寺が開山された。その後一向一揆によって多くの堂塔が焼失したが、延享2年(1745)に来順により再興し養老山大王寺とした。本尊は薬師如来である。

石段途中の右手に地蔵堂があり、前列中央に地蔵、左に阿弥陀、右に泰澄大師が坐し、中列には3体の観音、後列には西国三十三ヶ所観音が並んでいる。中列の3体の観音は細粒砂岩製で彩色が施されており、向かって左から阿耨観音、普悲観音、施楽観音と思われる。これらの3体の観音は法華経普門品に説かれる三十三体観音にみられるものである。

さらに石段を登り進むと、右手に地蔵や不動明王が立っているのが見えてくる。その向かいの小堂内には「大岩山 不動明王」と刻まれた石祠があり、大岩山日石寺不動明王の模刻が納められている。

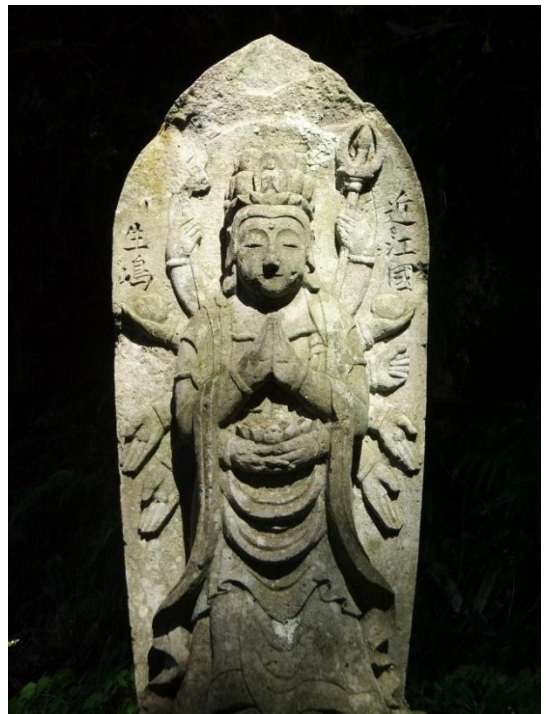
本堂の左手に「西国三十三所観音巡拝道」の標柱が建てられており、この先から西国三十三ヶ所観音が並ぶ祈りの小径を通りおっしょべ公園へと降りてゆく。途中には泰澄大師像、花山法皇像や三重石塔なども建てられている。おっしょべ公園内の滝の左右には、愛染明王、不空羅索観音が建てられている。



大王寺地蔵堂の石仏



花山法皇



西国第三十番宝蔵寺千手観音

06 牧口町 牧姫塚(蟬丸塚)／五輪塔、光導名号塔

粟津温泉街の近くの牧口町の水田の中に牧姫塚がある。またここは蟬丸塚という説もある。町内の八坂神社が所有、町内会で管理されており、この塚の中に建てられている五輪塔1基が市の文化財に指定されている。またこの五輪塔の他に、五輪塔の残欠2点、灯籠2基、光導書の名号塔1基が遺存する。

牧姫は平安時代末期の皇女と伝えられるが、詳細は不明である。訳あって都よりこの地に流され、この場所で没したとされている。五輪塔は牧姫の供養塔として建てられてと伝えられている。

蟬丸は平安時代前期の歌人で、滋賀県大津市の逢坂の関に庵を構えていた。歌を詠みながら旅を続けていたのだが、福井県越前町(旧宮崎村)野の農家で滞在中に病死した。遺言に従い、その場所に蟬丸の墓が建てられた。宝篋印塔の残欠と五輪塔の残欠とを組み合わせたとみられる石塔3基が並んでおり、すぐそばには小倉百人一首でお馴染みの「これやこの行くも帰るも分かれては 知るも知らぬも逢坂の関」の歌碑が建てられている。しかし蟬丸がここ牧口町に訪れた記録は見当たらない。



五輪塔(牧姫供養塔)

五輪塔は地上高93cmほどの花崗岩製で、水輪には3体の坐像が陽刻されている。中央の像がやや大きいことから、これらは主尊と脇侍とみられるが、像容は不明である。火輪や水輪の形状から、南北朝時代～室町時代の造立と考えられる。花崗岩はこの近隣では採取されない石材なので、この五輪塔は県外で作られたものと思われる。

光導名号塔は五輪塔のすぐ横に建てられている。地上高88cmほどの砂岩製で、粗く四角柱に加工されている。正面に大きく独特の丸い文字で「南無阿弥陀佛」と刻まれているのだが、その下は土中に埋まっており、光導の署名や花押が入っているのかわからない。

左側面に「明治十／■六月／建之／奉／蟬丸」の銘が読み取れ、蟬丸の供養塔として建てられたことがうかがえる。蟬丸は生没年不明であるが、旧暦5月24日に没したと伝えられ、新暦では6月24日が蟬丸忌となっている。この名号塔は六



光導名号塔(蟬丸供養塔)

月建之と記されているので、蟬丸忌にあわせて建てられたものと思われる。

右側面に「■導大師■■■■…」の文字が読み取れ、これは光導が名号書の手本とした善導大師であろう。光導晩年の76歳頃の造立であるが、三光院から近い場所であることから、光導が直接造立に関与したものと考えられる。

07 観音下町 観音下石(日華石)採石場／露天掘りの採石場(観音下石材)

鉾山の町尾小屋へ向かう途中の西尾の里に観音下の町がある。ここでは観音下石材が日華石と称する軟質の黄色～淡褐色の凝灰岩を採石している。観音下石材ではチェーンソーによる露天掘りを行っており、大正時代初期の操業である。観音下の石は石仏に使用されることは少なく、塀や石蔵等に用いられることが多い。小松市内ばかりでなく、金沢市内などでもよく見かける。

採石場右の道を少し行くと、観音山の登り口が見えてくる。日華石を敷き詰めた階段の脇に笏谷石製の観音が建てられている。西国三十三ヶ所観音が立ち並ぶ石段を登りきると、日本海を見下ろす頂上に観音堂が建てられている。



観音下石(日華石)露天掘りの採石場



チェーンソー式石切機

08 観音下町 白山神社／灯籠、層塔、五輪塔群

白山神社境内に観音下石製の石造物が立ち並ぶ。大型の灯籠や層塔などが建てられている。本殿の

奥の岩盤をくり抜いた巖窟に、小さな五輪塔が並べられている。



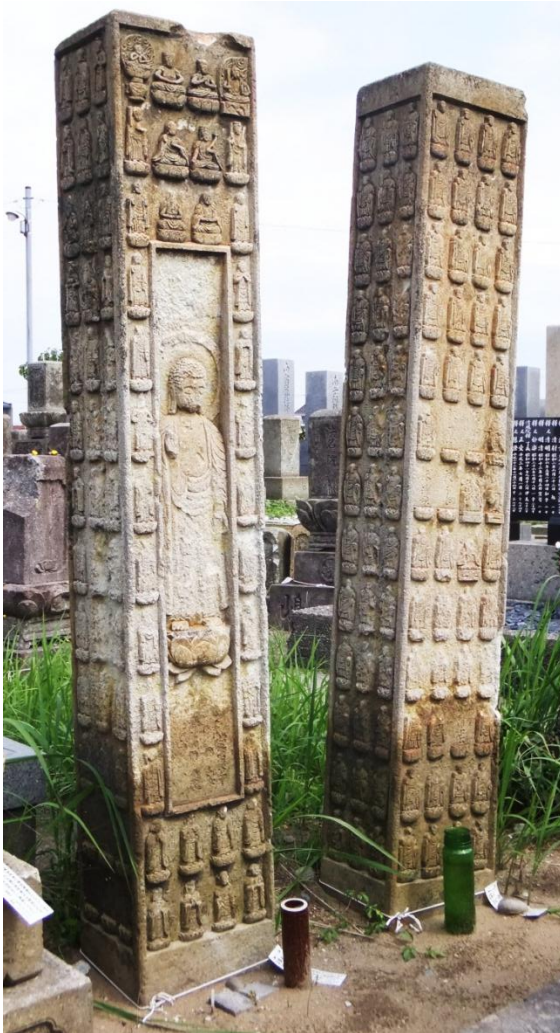
五輪塔群 灯籠



09 向本折町 市営共同墓地／千体仏供養塔 2基

この市営共同墓地は、海老町三昧と呼ばれている。三昧とは火葬場のことである。この墓地内に、千体仏供養塔と称される1対の石塔が建てられている。2基共に地上高約210cm、幅36cm、奥30cmの角柱型で、右側面が大きく磨滅している。表面は黄ばんでいるが、欠け落ちた部分を見ると淡緑青色の凝灰岩で、滝ヶ原石であろうか。左塔の中央に大きな如来像が彫られ、2基の各3面に、あわせて260体ほどの小さな像が陽刻され、各尊像の右上に名前が刻まれている。また蓮座上に尊像を陽刻せず、戒名が刻まれているものもいくつかみられる。

加南地方史研究会発行の『目で見ると小松の歴史』に次のように書かれている。「そのいわれははっきりとしないが、藩制の末頃ある老婆が、養育費目当てに子供をつぎつぎと貰い子をして、死にいたらしめたとのことである。そのため祟りがあり、後年死んだ子供を供養するため仏と子供の年令を刻んでこれを建てたと伝えられている。」



千体仏供養塔 2基



左塔の上部

10 天神町 小松天満宮／十五重石塔

小松天満宮の境内に、高さ7メートル余りの坪野石製の優美な十五重石塔が建てられている。小松天満宮は明暦3年(1657)に創建されており、この石塔は創建当時の造立である。昭和40年に市の文化財に指定されている。最上部には総輪ではなく、宝珠が乗せられている。

坪野石は金沢市坪野町で産出される硬質の黒色の石材である。約2千万年前の火砕流によってできた溶結凝灰岩とみられ、極めて産出量が少なく貴重な石材である。



小松天満宮の十五重石塔

11 寺町 曹洞宗建聖寺／地藏

曹洞宗建聖寺の境内に立派な地藏堂が建てられている。宝珠と錫杖を持った等身大の地藏立像が安置されている。建聖寺には、立花北枝が元禄2年、松尾芭蕉が訪れた時に作った芭蕉の木像がある。



建聖寺の地藏

12 向本折町 多太神社／斉藤実盛石像、松尾芭蕉石像

斉藤実盛は寿永2年(1183)加賀市篠原で、木曾義仲軍の手塚太郎光盛に討たれた。多太神社には実盛の兜が残されている。時衆歴代上人による実盛の供養が行われており、その回向札が多数納められている。また元禄2年に芭蕉が訪れ「むざんやな 甲の下のきりぎりす」の句を詠んでいる。境内には実盛石像、芭蕉石像、芭蕉句碑等が建てられている。



芭蕉句碑

13 串茶屋町 共同墓地／遊女の墓

北国街道の串茶屋は廓の街として栄えた。集落のはずれにある共同墓地内には、30基余りの遊女の墓が残されている。全国でもこれだけ多くの遊女の墓が残されている場所は例がない。最も古い墓標は元禄14年で、最も新しい墓標は嘉永6年である。用いられている石材は、滝ヶ原石が最も多く、ついで観音下石であり、笏谷石等もみられる。



遊女の墓

14 河田町 路傍／地持地蔵、「下品中生」

上河田バス停横に、地蔵と石塔とが並んで建てられている。石祠内に納められている地蔵は、両手で念珠を以っており、これは六地蔵のうちの1体である地持地蔵である。

角柱型の石塔の正面中央に九品のうちの一つである「下品中生」が刻まれ、その上に地持地蔵の種子「イー」が刻まれている。右側面に「安政四年」の銘が入っている。



地持地蔵、「下品中生」

15 能美町 共同墓地／陀羅尼地蔵、「下品下生」

共同墓地入り口に、地蔵と石塔とが並んで建てられている。石祠内に納められている地蔵は、右手が施無畏印、左手が引摂印であり、これは六地蔵のうちの1体である陀羅尼地蔵である。

角柱型の石塔の正面中央に「下品下生」と刻まれている。その上に陀羅尼地蔵の「イー」とみられる種子が刻まれているのだが、堂内に納められているため暗くはつきりとしにくい。右側面に「安政四年」の銘が入っている。



「下品下生」

16 千代町 共同墓地／鶏亀地蔵、「鶏亀地蔵」

共同墓地入り口の六地蔵のとなりに、地蔵と石塔とが並んで建てられている。六地蔵は平成18年に作られたものであるが、となりに建てられている地蔵は、それ以前からこの場所にあった。石祠内に納められている地蔵は、宝珠と錫杖を持っており、これは六地蔵のうちの1体である鶏亀地蔵である。

角柱型の石塔の正面中央に「鶏亀地蔵」と刻まれて、その上に鶏亀地蔵の種子「イ」が刻まれている。こちらにも同じく右側面に「安政四年」の銘が入っている。

これらの単体で建てられた地持地蔵、陀羅尼地蔵、鶏亀地蔵は、いずれも小松市北東部の国府地区周辺にみられる。石材や法量がほぼ同じで、全て安政4年に建てられている。この近隣では、六地蔵の他の3体である宝性地蔵、法性地蔵、法印地蔵の単体像は確認していない。



鶏亀地蔵、「鶏亀地蔵」

17 埴田町 路傍／虫塚

加賀産業道路の埴田南交差点脇に「虫塚」と刻まれた石塔が建てられている。高さ約170cmの円柱型で鶯川の石である。

天保10年ウンカによる稲作の被害があり、駆除した虫たちの供養として建てられた。裏面には造立の経緯が細かく記されている。市の文化財に指定されている。



埴田町の虫塚



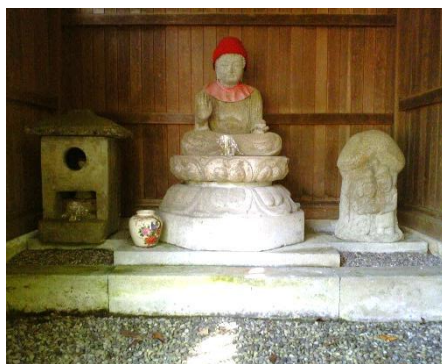
岩淵町の虫塚

18 岩淵町 路傍／虫塚

岩淵町公民館脇に建てられている。埴田町のものと同様、天保10年に駆除した虫たちの供養として建てられた。同じく円柱型であるが、ひとまわり小さく、高さ約120cmである。こちらにも造立の経緯が記されている。もと建てられていた場所から移されているので、市の文化財の指定を受けていない。

19 中海町 赤穂谷温泉／薬師如来、金精道祖神

赤穂谷温泉の敷地内に小堂が建てられており、薬師如来と男根型の道祖神が納められている。いずれも近年の作である。



薬師如来と金精道祖神



寶生寺の車地藏

20 中海町 高野山真言宗寶生寺／車地藏

赤穂谷温泉向かいの高野山真言宗寶生寺境内に、地藏が彫られた石造の摩尼車が建てられている。車の部分には「南無阿弥陀仏」が刻まれており、1回すごとに南無阿弥陀仏を一度唱えたのと同じ事になる。

21 原町 集落はずれ／仏御前墓標

仏御前は永暦元年(1160)白河兵太夫の娘として生まれ、14歳で京に上り、その後仏門に入り報音尼と名乗った。安元2年(1176)故郷の原に戻るのだが、その途中で平清盛の子を出産した。原に帰った仏御前は、治承4年(1180)に20歳の若さでこの世を去った。

原の集落から少しはずれた阿稜山麓に、仏御前の墓が建てられている。五輪塔と地蔵が並んでおり、いずれも中硬質の淡緑青色の凝灰岩であり、原で産出された石と思われる。五輪塔の火輪に「ラ」が陽刻されている。



仏御前の墓

22 原町 仏御前屋敷跡／仏御前供養塔

原集落のはずれに仏御前の屋敷跡があり、3基の石造物が並んで建てられている。向かって左から仏御前の供養碑、供養祠、墓石と考えられている。中央に建てられている石祠は先述の墓地から移されたものと伝えられている。3基共に中硬質の淡緑青色の凝灰岩で、原で産出された石とみられる。

石祠の正面には「佛御前墳」と、仏御前の命日である「治承四年八月十八日」の日付が刻まれている。また右側面に「従金沢建之」と記され、左側面には供養のために詠まれた歌が刻まれている。



仏御前の供養塔

23 原町 林家／金剛界大日種子・阿弥陀坐像板碑

原町の林家に仏御前の像が安置されている。これは仏御前が京から戻る時に、分身として祇王寺に残してきたものと伝えられている。土を固めた上に布を張り、漆を塗って作られている。またこの近くには花山法皇が建てたとされる五重塔跡地があり、その場所から出土したといわれる板碑も同家に保管されている。これは中硬質の淡緑青色の凝灰岩で原の石である。上部を三角の山型に加工し三条線を刻み、その下に金剛界大日如来の種子「バン」を薬研彫りして、さらに下に如来形坐像を薄肉彫りしている。中世の作であろうか、手法に疑問がみられる。

原では滝ヶ原よりも早くから石材が産出されていたのだが、現在では採石は行われていない。



板碑

24 尾小屋町 路傍／仏御前の地蔵

仏御前は京から原に戻る途中、この地で平清盛の子を出産したのだが、その子はすぐに亡くなった。この地蔵はその供養のために、仏御前が建てたと伝えられている。



仏御前の地蔵

25 北浅井町 路傍／光導名号塔

市場北口交差点のすぐそばに、光導名号塔、地蔵、地蔵の由来が記された石標が並んで建てられている。

光導名号塔は地上高約155cm、幅34cm、奥30cmの角柱型で、砂岩製である。

正面に大きく丸い文字の「南無阿弥陀仏」が刻まれているが「佛」の文字の下半分ほどからは土中に埋もれている。右側面に「極重悪人無他方便 唯称弥陀得生極楽」と刻まれている。また左側面には細かな文字が刻まれており、これは光導が詠んだ歌ではないかと思われる。



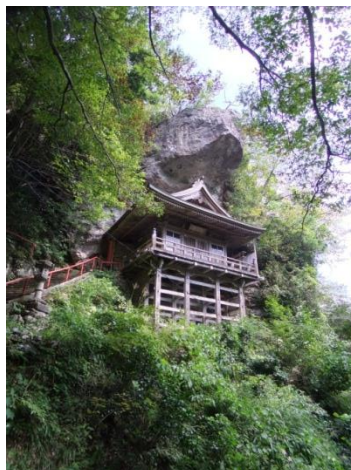
光導名号塔

26 赤瀬町 那殿観音(那谷寺奥の院)／西国三十三ヶ所観音

赤瀬那殿観音山は赤瀬温泉の上流に位置し、那谷寺奥の院とも称される。赤瀬温泉の脇を過ぎると、西国三十三ヶ所観音が立ち並ぶ参道に入る。途中に馬頭観音堂、子育て地蔵堂や三重塔なども建てられている。第10番観音を過ぎると険しい石段になる。石段の登り口には泰澄大師の銅像が建てられている。この石段を



西国第十三番の石山寺如意輪観音



那殿観音(那谷寺奥の院)

登り進むと、第28番観音を過ぎた所の岸壁に拝殿が建てられている。投入堂を思わせるような拝殿は、昭和34年に再建されたものである。拝殿からさらに上へと向かう。石段を登るといよりも岩山をよじ登る感じで、第33番観音を過ぎると拝殿の上にある奥の院の巖窟へたどり着く。